社会医学と私

四天王寺大学大学院　NPO HEALTH SUPPORT OSAKA　逢　坂　隆　子

社医研との出会いは、1968 年に阪大医学部公衆衛生学教室に入ったことに始まる。同教室（朝倉新太郎教授）に社医研の事務局が置かれていた時期であり、毎年社医研に参加するようになった。当時は同教室では、朝倉教授を中心にして、大都市の健康問題を研究するものが多く、私もその 1 人であった。

「大都市の健康指標が他地域と比べて極めて悪いのはどうしてか。」名古屋市・北九州市・京都・東京他各地から社医研メンバーが何度も集まり、問題意識を共有化して研究を進めていく場に幸いにも同席させていただくことができた。健康問題の裏にある社会経済要因があぶりだされていく。胸がわくわくするようなディスカッションが続き、強い感動を覚えたことを記憶している。これらの研究成果は「社会医学研究第 1 号」に結実した。

その後、大阪府保健所医師として十数年勤務する中で保健師のみなさんと一緒に路地裏まで歩き回った。そして、府民の健康破綻を引き起こす日々の暮らし･労働の実態を、頭だけの理解ではなく、目・耳・心で納得することができたように思う。

1 年間の研究成果を毎年の総会で発表し、先輩諸氏から、時には暖かく時には厳しく御指導いただき、続く 1 年間の自分の軌道を修正してなんとかここまで仕事を続けられた気がしている。かつて総会をお寺の宿坊や学生セミナーハウスで開催し、参加者はほとんど全員とまりこんで、合宿のように、夜通し喧々諤々と議論していたこともとても楽しい思い出であり、勉強になった。

社会医学会会員の高齢化傾向がみられるようであるが、（私自身に対してそうであったように）若い研究者に対する、会員相互の教育・研究機能の強化も学会の重要な課題だろう。

日本社会医学会がますます発展することを切に祈念する。